



1938年2月の天象

星 座 “うし” 座の“アルデバラン”を中心に全天の一等星の約半數といふものが、今や、我々の眼前にあつて、めばしい遊星達の大部分が太陽に近くて観られないこの月の星空を賑はしてゐてくれる。まことに、舊約の昔から多くの人々の胸を打つた、はげしい神の意志は、今もなほ、我々仰ぎみる者の心をふるはせずにはおかない。

いま我々の前に現はれてゐる星座群は、我々に星座を意識せしめる點において、他のどの月のそれよりも、すぐれてゐる。珠玉のやうな星の群がまたいてゐる。

これらの、まとまつた星座の中で、比較的我々に星座の擴がりを感じかしめるものは“オリオン”と“ふたご”とであるが、それは、きつと、この二つには特に星座の主星として仰がるべき際立つた星がないために（或ひは、有力な星が多すぎるために）その星座の重心が分散せられるからであらう。

東の空はやゝ閑散である。“かに”座の中央に有名な散開星團“プレセペ”があるが、今を去るあまり遠からぬ昔に、この星座のあたりに遊星達が殆んど全て集つたことがあつたさうである。その時にはどのやうな美しい調和がみられたことであらうか。

いつのまにか、東天低きところに“おほくま”と“しし”とが昇つて來た。春の息吹きがかすかに北半球の耳をうつ。人々に生命を吹きこむ希望の聲音がどこからか地を震はせて傳はつてくる。曉はもはやあの地平の彼方にせまつてきた。

蝕變星アルゴル 今月は10回の極小期をもつてゐるが、何れも觀測に不適當であ

る。たゞ18日の19時半の時には月出前の数時間(月齢18)を利用することが出来る。もう夜半を過ぎると西に没するやうになるから機會は漸次少なくなつて行く。

變 星 定期的な、しかも、豊富な餘裕のすくない我々にも、ミラ型(長週期)のものなら充分追跡できる。極大日の豫報は本誌上に發表される筈であるから、それによつて適當な星を選び、極大日の少し以前から觀測せられるようおすすめる。

彗 星 この昭和13年にはゲール、ショア、テムベル・スキフト、メトカルフの4週期彗星が現はれてもよいことになつてゐる。しかしショアは1918年に發見されたきりでその後2回の回歸にも發見されず、テムベル・スキフトは週期6年弱の週期星として跳び跳びに4回見つけられてゐたが最近の回歸には、時期が悪かつたのか、遂に發見されなかつた。また、メトカルフは1906年秋に發見され週期約8年の楕圓軌道をもつてゐるが光も弱く、その後全く顧られてゐない。ゲールは1927年に最初に發見され、その後週期は11年弱と計算されたもので今年が最初の回歸であり、相當に期待されてゐる。“へびつかひ”から“いて”の邊に現れる筈である。

流 星 今月は特に著しい流星群はない。月初めには“まきを”座の北部を輻射點とするものが飛ぶ。

冥王星 “かに”座 μ 星の近くを西北に逆行中、この星には、強力な寫眞で見る以外には、ちよつとお目にかゝれない。

海王星 “しし”座 σ 星の南方を西北に逆行してゐるから、今月は、21時頃には昇つてくるやうになる。對衝を一ヶ月後にひかへ、例年の如く觀測の好機にある。光度7.7級。

天王星 “ひつじ”座の南部を順行してゐるため、當分は觀望に好適である。光度は6.2級で、ますます地球より遠ざかりつつある。7日の宵には月と會合する。

土 星 “う”座の南部をゆつくり順行してゐる。春分點のやゝ東にあつて太陽を待ち合はせてゐる形である。光度は約1級で、今後次第に増しては行くが、もはや西空に低く、來月になると全く見えなくなつてしまふ。3日に

は火星に近づく。

木 星. “やぎ”座を順行してゐるため太陽に近くて観られない。來月になれば見られよう。

火 星. “うを”座の南部を順行してゐる。先月末に春分點を越え、3日には土星に追いつき、太陽とほぼ同じ速度でどんどん走つてゐる。光度は1.4級で、後からは太陽に追ひたてられ、距離も遠くなつたため観測には全く不適當である。但し、西空に低く薄明の中に土星とならんで赤く光つてゐるのは、肉眼で見て面白からう。

金 星. “やぎ”座より“みづがめ”座を通つて順行してゐる。月初めは曉の星として太陽のごく僅か前に東にのぼつてくるが、4日には太陽に追いつき(外合)、その後は宵の西空にまはつて次第に太陽より離れる。それ故に、月末には日没後、金星、土星、火星の三輝星が等しい間隔で西の空にならぶわけである。光度は負3級半。

水 星. 曉の星で、この月は“いて”座より“やぎ”座を通つて“みづがめ”座まで順行する。光度は0級より負1級まで増加して行くが、次第に太陽に近づくために時期外れとなる。9日には遠日點を通り、17日には木星に極めて接近する。

月. 前月末に新月、8日に上弦、15日に満月、22日に下弦といふやうに變轉する。一面の銀世界に紙のやうな月が、のぞきこむやうに、冷い光を撒きちらしてゐる光景は、まことに、凄慘なものである。天と地との間には僅かの隙もないやうな緊張の氣がみなぎつてゐる。弦月の下、雪を蹴つて、地軸がゆりうごかされたのも、この月であつたが……。

太 陽. 4日の立春の聲をきくと、さすがにあたりの空氣にも一種の安心の氣分がみたされる。雪はまだまだ衰へないが、もう大丈夫だ。

太陽は“やぎ”座(寶瓶宮)より“みづがめ”座(雙魚宮)に進み、その出沒方位も北へまはり、従つて晝間も長くなり、地上の光景に一步先んじて、天界は冬の羈絆をのがれようと焦るのである。(P)